

I

N

T

SPECIAL

E

R

V

I

E

W

[ 教養人の時代 ] — ①



NHKワシントン支局長を経て、  
現在は外交・安全保障分野のジャーナリストとして活躍する手嶋龍一さん。  
日本初のインテリジェンス小説を書いた作家としても知られている。  
そんな手嶋さんに一風変わった少年時代のことから  
ジャーナリストという仕事についてまで幅広く話をうかがった。

外交ジャーナリスト・作家

手嶋 龍一

TESHIMA Ryuichi



## SPECIAL INTERVIEW

### 個性豊かな人々に生まれ 大らかに過ごした北の少年時代

生まれは北海道・芦別の炭鉱街。父親は炭鉱経営者だった。

僕の生まれ故郷は、北海道の炭鉱の街でした。そこは大らかな気風にあふれ、戦後復興のエネルギーに満ちた魅力的なところだった。そして何より、そこでは様々な人間模様が繰り広げられていました。宵越しの金は持たない。そんな人たちは坑内からあがってくると炭住街の自宅でコップ酒を呑み、ツボにサイコロを入れて振り興じていたものです。僕が勝負事に強いのは彼らの教えのおかげです(笑)。中学でも卒業してまっすぐ実社会に入った同級生も珍しくなかった。高校もおおらかでよかったなあ。先生のなかにはお坊さん、神主さん、農場主を兼業しているひともいましたよ。近くに競馬場まであり、予想屋のおばさんとは大の仲良しになり、馬の見立てを教わりました。時おり「風変わりなひとだ」といわれるのですが、人生の先生がいささか変わっているからでしょう。

大学受験については参考になる話ができずにすみません。そのころ、亡くなった父の炭鉱が斜陽化し、会社をたたむ資金繰りに奔走したりしていました。勝負強いのを頼りに、アラビア石油株の大相場を当てたのでした。そのため、就職する必要はなかったのですが、当時はまだ「フリーター」という便利な言葉もない頃でした。横須賀線の車中でたまたま読んだスパイ小説から啓示を受け、イギリス放送協会(BBC)に勤めるチェコ人の二重スパイが暗殺される話なのですが、ああ日本にも放送協会(NHK)があるとひらめき、入社試験を受けたのでした。

これも若い方々に参考になる話ではなくごめんなさい。決して「社会の木鐸(※1)」に

という志を抱いてジャーナリストになったわけではありません。ただ、他人の意見や世間の価値観に従って人生の選択をしたわけじゃない。これがせめてもの救いかもしれません(笑)。あくまで自分の意志でやったことですから、責任は我にありということになる。でも、こんな不純な動機で放送局に身を置いたものの、ジャーナリストとしての資質があるのか、不安でしたよ。

### 試練の街、ワシントンで— 米ジャーナリズムの懐の深さ

記者としての振り出しは北海道。基地の街横須賀を経て政治部で外務省、首相官邸、自民党などを担当。その後、ワシントン特派員となり、ハーバード大学国際問題研究所を経てボン支局長、さらにはワシントン支局長を8年間務めている。

ワシントンへの転勤も突如辞令が出たので赴任しただけのことで、志望したわけではありません。何の準備もなく苛烈(※2)な情報都市に赴くのは、酸素ボンベなしでエベレストの山頂に挑むようなもの。当初は全

他人の価値観に左右されて、大切な人生を選択してはいけけない。人や書物との出会いの中で自分の揺るぎない視点を磨いてほしい。

## profile

### 手嶋 龍一

外交ジャーナリスト・作家

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授

1949年北海道生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。NHKの政治部記者として首相官邸、外務省、自民党を担当。その後、ワシントン特派員としてアメリカに赴任し、冷戦の終焉に立ち会う。湾岸戦争では最前線へ。その後、ハーバード大学CFIA・国際問題研究センターに招聘される。続いてボン支局長を経てワシントン支局長を8年間にわたって務める。この間、ブッシュ大統領をはじめ、重要閣僚の単独インタビューを数多くこなした。01年9.11の同時多発テロ事件に際しては、11日間の昼夜連続の中継放送を担い、冷静で的確な報告で視聴者の圧倒的な支持を得た。05年NHKから独立し、日本で初めてのインテリジェント小説『ウルトラ・ダラー』を発表。姉妹篇『スギハラ・ダラー』とあわせて50万部の大ヒットに。『たそがれゆく日米同盟』、『外交敗戦』、『インテリジェンスの賢者たち』は新潮文庫のロングセラーとして読み継がれている。このほかに『武器なき“環境”戦争』(池上彰氏との対論、角川SSC)や『インテリジェンス 武器なき戦争』(佐藤優氏との対論、幻冬舎新書)など著書多数。



20歳の時、中国の周恩来総理が贈ってくれた言葉。「革命をやり遂げるには若くて、無名で、貧しくなければ」。

く歯がたたなかつたなあ。ただワシントンの街で取材を重ねているうちに、自分のなかの何かが変わったように思います。巨大な権力と対峙(※3)し、時にその間に切り込むアメリカの仲間と過ごしているうち、わがこころの内側で化学変化が起きたのでしょう。

アメリカのジャーナリストは、就職試験を受けて巨大メディアに入るわけではない。大学を出るとまず名もなきメディアで下積み耐え、一步一步次なる目標によじ登っていく。そしてわずかな蓄えを頼りに大学院に戻り、再びメディアの現場に帰っていきます。経済大国といわれた日本の全盛期のように、企業が若者をまっさらなところから育てていくわけではない。自由だけれど、苛烈な環境。それがアメリカ流なのです。北のフロンティアに育った僕には、そんなアメリカのスピリットに共感できるものがあつたのかもしれない。

ワシントン特派員として東西冷戦の終焉を目撃した90年代初頭、日米同盟に亀裂が生じていた。次期支援戦闘機の日米共同開発をめぐる東京・ワシントンの暗闘を描いたノンフィクション作品「ニッポンFSXを撃て」、そして湾岸戦争での日本外交の迷走を描いた「一九九一年 日本敗北」がアメリカでも注目され、ハーバード大学・国際問題研究所(CFIA)にフェローとして招聘された。

いまも外交ジャーナリストとして仕事を続けられるのは、ハーバードでの研究生生活の賜物です。CFIAの同僚には、スペインの有力紙エルパイスの社主、後の韓国外相、後のスリランカ法相、現役のコロンビアの国防相とベネゼーラの経済相など異色の人材が選ばれ、共に貴重な時間を過ごしました。

その時、ハーバード大学で出会ったロー

スクールの学生には鮮烈な印象を受けました。さすが大国の若者は鍛え抜かれている。海軍大学で行われた1週間ぶち抜きの危機シミュレーションにアシスタントとして来てもらったのですが、幾晩徹夜しても、にこにこしながら膨大な作業をこなしていく。気は優しくて、力持ち一体力、知力、気力ともに余裕があるのでしょ。

僕は、カトリック神父にして高名な国際政治学者のブライアン・ヘア教授に師事したのですが、ほかにも「文明の衝突」のサミュエル・ハンティントン教授、政権の高官もつとめたジョセフ・ナイ教授、キッシンジャーの論敵スタンレー・ホフマン教授らにも指導を受けました。いま思うと夢のような布陣だったなあ(笑)。

ハーバード大学で、現代史の泰斗(※4)、アーネスト・メイ教授のベトナム戦争に関するセミナーに参加しました。サイゴン陥落の時には生まれていない学生も参加していたのですが、後から来た者の恩寵なのでしょう。あの戦争の現実を知っていたつもりの僕らより、より広い視野で、ベトナム戦争の本質に迫っていました。僕らは当時のメディアを通じて、ベトコンは北の政府から自立した民族解放勢力だと信じていたのですから。大学でこれはという先生に学ぶことがどれほど貴重なことかを身をもって知りました。

### ■ 水面下では起きているが まだ見ぬ事態の予兆を伝える

表層の出来事を漫然と伝えるのではなく、事態の奥底に潜んでいる真実をどう伝えていくのか。そして歴史を動かしていく真の指導者は誰かを見極めて、取材対象に肉薄していく、それがジャーナリストの務めだと手嶋さんは語る。

(注) ※1 古代中国で、人民に法令などを示すときに用いられた木製の舌のある鈴。転じて、人々を教え導く人。 ※2 厳しく激しいこと。 ※3 向かい合って争ったこと。 ※4 「泰山北斗」の略。その道の権威。 ※5 自らの意志でなく、他人の力、権威、支配で行動すること。

炭鉱の坑内に分け入っていくトロッコにはカナリアの籠がぶら下がっていた。カナリアは敏感で一酸化炭素が漏れ出していると人より先にぱたりと死んでしまうからです。ジャーナリストとはカナリアのように、忍び寄る危機の足音を察知して警告する存在であるべきです。

ドイツの暫定首都だったボンの特派員時代に出会ったヘルムート・コール首相は、昼行燈のようにメディアから酷評されていたのですが、東西ドイツの統一を成し遂げ、共通通貨ユーロを誕生させました。最初にワシントンに赴任した時の大統領は、俳優だったロナルド・レーガンさんで、これまた東部のエリート層は見下していた。しかし冷戦に幕を下ろしたのは彼でした。政治家の見立てほど難しいものはない。でも現代史を紡ぎだしていく巨人たちを近くで目の当たりにできる仕事は刺激的です。

### 本を読む、映画を観る、人に会う。 人生は短い、だからまずやってみよう

学生時代に国交のなかった中国に渡り、周恩来首相と面談したという手嶋さん。

周恩来首相は別れ際に「革命をやり遂げるには若くて、無名で、貧しくなければならない、という毛主席の言葉を贈りましょう」と言い、私はもはや革命家の資格がないと孤独な表情をみせました。あとから考えると、彼が仕えていた毛沢東への痛烈な批判であったのかもしれませんが。でもいまの若者にも、この言葉は永遠の輝きを持っています。何ごとかを成し遂げるには、若く、貧しく、無名で—。

では、今の高校生に手嶋さんから伝えたいことは何か。そう尋ねると、2冊の本を紹介してくれた。

ロアルド・ダールの「少年」と「単独飛行」。いずれも「チョコレート工場の秘密」で有名なダールの自伝です。世間一般の常識や価値観に従うのではなく、自尊心と信じる人生を歩む。それを貫いた人の航跡が綴られています。他律的(※5)に針路を決めるのではなく、自分の思うところにあくまで忠実にと助言したい。それには多様な人々と出会い、本を読み、映画を観たりするなかで、自ら目指す頂が見えてくるでしょう。坂口安吾の名エッセイに「ラムネ氏のこと」があります。ふぐにあたって死んでいく漁師がこれしきであきらめると言い残すくだりがある。若い皆さんも険しい頂にチャレンジする人生を自分で選びとってほしいと願っています。

